『夏の夜の夢』：無意識の効果

福　井　妙　子

序　論

シェイクスピアの祝祭喜劇『夏の夜の夢』には不思議な要素が沢山盛りこまれている。宮廷人やアテネの職人達と妖精達が，複雑に交差している。さらに町から森へアクションを移していて，劇的な興奮に満ちていて，娯楽の要素を盛りこんでいる。その中で人々は宮廷から森へと誘われて，月明かりの中で人間の愚行が行われる。愚行というのは，例えば Puck が 3 幕 2 場115行で Demetrius を追いかけている Helena を見て，「人間ってどうしてこう愚かしいんですかね」と冷やかに眺めているところ等にうかがえる。さて，月はラテン語の luna で lunacy は，むろん狂気の意味であり，狂気は月の変化によって引き起こされているし，また森，wood にも madness の意味がある。C. L. バーバーは，これは玉泉八州男訳だが『シェイクスピアの祝祭喜劇』で「森とは変身の場所・濡れた月明かりとか明滅する星明かりの中で万物が変化し，互いに溶けて融合しあう場所としておかれるのであり，変身とは恋する者の心が見えるものと，それが欲しているものの双方を表わしているのである。」[1]と月と森との関係を詳しく述べている。私はこの関わりに登場人物達が，意識しないうちに入りこみ何らかの力によって，混迷の世界へ巻き込まれ，true love を成就させていく様を追求してみたい。私のいう無意識の効果とは，意識しないうちに fancy が生まれ，変化し，もつれ，夢を見て，一つの輪となり，やがて無から有なるものが形づくられていくことを意味する。この作品には，劇中劇『若いピラマスとその恋人シィズビーの

冗漫にして簡潔な一場，悲劇的，滑稽劇』があり，その中の序詞役の口上について Theseus が，「もつれた鎖のようだ―― 一つ一つの輪はいいのだが，繋がり具合が出鱈目だ。」と評しているが，これが不思議に劇全体を象徴している観がある。私はこの一つ一つの輪を台詞から紐(ひも)といて，出鱈目がどのように気がつかないうちに統一されているかを考察したい。

I

アテネの公爵 Theseus は，剣で愛を獲得したアマゾンの女王 Hippolyta との結婚式を待ち切れず，幕開けで月にひっかけて次のように言う。

The. Now, fair Hippolyta, our nuptial hour
Draws on apace ; four happy days bring in
Another moon : but, O, methinks, how slow
This old moon wanes! She lingers my desires,
Like to a step-dame or a dowager
Long withering out a young man's revenue,
（I．i．1-6）（下線筆者）

彼は，Hippolyta との結婚を四日後に控えて待遠しい。Another moon‘新月の宵になれば結婚なのだが，古い月の欠けていくのがもどかしい’と自分のはやる欲望を押えかねて，若者が継母や未亡人からの遺産を待望んでいる比喩を持出して嘆いている。一方 Hippolyta は，Theseus よりも考え方が現代的で説得力がある。

Hip. Four days will quickly steep themselves in night ;
Four nights will quickly dream away the time ;
And then the moon, like to a silver bow
New bent in heaven, shall behold the night
Of our solemnities. （I．i．7-11）（下線筆者）

彼女は月の形の変化を考えていて，Theseus の‘四日過ごせば’に対して，

‘その四日の昼は忽(たちま)ち夜の闇に溶け込み，四日の夜は忽(たちま)ち‘夢’と消えましょう’と時の速さを強調していて，‘新月が自分達の結婚の儀を見守ってくれる’と答えているが，この二人の台詞の段階では気がつかないが，結果としては一日早く婚礼が行われる。ここに Theseus の想像のずれが[2]あると Leo サリンガーも言っている。ここで彼等の台詞の中の月について考えてみると，作品の中で一つの輪の役割を担っている事に気づく。後で述べるが，Hermia による三つの選択から選ぶ一つは，Diana の祭壇であり，Oberon と Titania が会う場所も moonlight の中で，love-juice の花も Cupid が石女(うまずめ)の月を狙って放った矢が外れて刺ったものであり，Bottom 達の芝居にも月がなくてはならないのである。

以上から幕開けの‘月は欠けていく’は，つまり‘変化していく’事であり，この芝居の混乱を冒頭からイメージしている。例えば，Theseus に例をとると，彼は略奪結婚の良心的な痛みからか‘another key’で‘華やかに，賑やかに，楽しいお祭り騒ぎをもって’(Ⅰ．ⅰ．18－19) 結婚式を行うと宣言しているが，他の公的な仕事には身が入っていない。というのは，Hermia を裁く時，‘新月になれば…お前も覚悟を決めねばならぬぞ！’(Ⅰ，ⅰ，83－84) と要求しているが，実際は，取り決めも明確でない。何故ならば，第四幕第一場の狩りの場面で，Egeus に法の裁きをと迫られると，‘Egeus お前の気持を押える事になるが…我々と共に神殿に連れて行き，永遠の契りを結ばせてやりたい！’と実に手早い判決を下しているからである。それでは次にこの Hermia 達について考えてみたい。

II

Egeus の娘 Hermia は，父の同意を得た Demetrius を嫌って，Lysander との結婚を望んでいる。父は Lysander を Theseus に

Ege. Thou hast <u>by moolight at her window sung</u>
<u>With faining voice of feigning love,</u>

And stol'n the impression of her fantasy

（Ⅰ．i．30-32）（下線筆者）

'月に誘われて，窓辺で娘に作り声で，偽りの恋歌をつくって，娘の愛を盗んでしまった'と訴えると，Hermia も，「何の力が私をこのようにしたのか分かりません。」と答えているが，親子共々気がつかないうちに，Lysander の存在が彼女の心の中に宿ってしまった。これは何故か。Hermia は，Theseus に「父が私の目で Lysander を見て欲しい。」と言うと，Theseus は，「あなたの目が父親の分別で見るべきであろう。」と答えているが，月のように球体である目の不可思議な二重ぼかしの力が分る。

Hermia と Lysander は，三つの選択(1)死ぬか (2)父の意志に従うか (3)月の女神 Diana の祭壇か，のどれにも従わず true love を追求しようと，人を狂わせる森の外れの叔母の家へ駆落ちの手段をとる。それに Demetrius と Helena の複雑な輪が加わり，互いに気がつかないうちに混乱の渦(うず)に入っていく。森の中で Oberon の目に止まるのだが，'mortal'人間である彼らは，'spirit'妖精には気がつかない。森の中でさ迷い，疲れ，眠ってしまった彼らは，いつの間にか，悪戯で，そそっかしく，自由自在に化ける妖精 Puck によって，間違って love-juice を塗られ，恋の結び目をほぐされる。Lysander は，Helena を愛するようになり，Hermia の true love は，憎しみへと変っていく。Demetrius は，love-juice によって Helena を求愛するように変わる。この混乱ぶりは，妖精のモリス遊びのようであり，J. L. コールダーウッドは，[3]思いを遂げられない様を merry-go-round に例えている。

ここで混乱を引き起こした Puck について考えると，Jan Kott は，Puck を「早変わりの名人であり，手品師であり，間違いの喜劇の演出家でもある…彼は偶然であり，運命であり，不慮の事件でもある。…Puck は悪戯(いたずら)するが，自分で自分のやったことが分っていない。だからこそ彼はアルレキーノのように舞台の上でとんぼ返りができるのだ。」[4]と言っている

が，第2幕第1場で焼きりんごに化けて，おしゃべり婆さんの唇の前でとんぼを切って，たるんだ胸元を酒でぐっしょりさせ，相手を，何が何だか分らず，あわてさせている。また森の中の恋人達を見て，

Puck. Then will two at once woo one :
That must needs be sport alone : (III. ii. 118-119)

とからかっているだけである。Puck の主人の Oberon は，男たちの決闘に及んだ様子を見て，Puck に声色を使わせ，二人を無意識のうちに夜の闇である地獄 Acheron の森の中へと誘う。一方女達も爪と足と口で戦い，両者は疲れ果て死を覚悟するが，これを見た Oberon は，Puck に Lysander の目に herb を塗って元の目に戻させ，無意識のうちに眠りと夢の中へ引き込む。

Obe. When they next wake, all this derision
Shall seem a dream and fruitless vision ;
And back to Athens shall the lovers wend,
With league whose date till death shall never end.
(III. ii. 370-373)

と Oberon は言うが，Puck は，'Jack shall have Jill.' (III. ii. 461) めでたし，めでたしとからかうだけである。

III

ここまで，まず Theseus と Hippolyta の'新月の宵になれば'の台詞から月の輪について述べ，次に Hermia と Lysander の駆落ちを巡る Helena と Demetrius の複雑な混乱の輪を見てきたが，三つ目にその混乱ぶりの原因は何処にあるかを妖精達に焦点をあて考えてみたい。

四人の若者達の love-juice による混乱は，Oberon と Titania の夫婦喧嘩がその原因であった。Timania の信者が生んだ Indian boy を Oberon が欲しがったので不和が生じた。そのため'mortal'な人間と'immortal'な

妖精の世界でもつれや混乱がおこり，

Tita. Is, as in mockery, set ; the spring, the summer,
The childing autumn, angry winter, change
Their wonted liveries ; and the mazed world,
By their increase, now knows not which is which.
And this same progeny of evils comes ;
From our debate from our dissension ;
We are their parents and original. (II. i. 111-117)

と Titania が季節の変化について言っているように，皆が彼らのとばっちりを蒙った。Oberon が changeling boy を欲しいために「この侮辱に対し，仕返しをするまでは，この森から一歩も出さぬぞ」(II. i. 146-147) とおどし，Puck を使って，例の love-juice を眠っている Titania の目に塗る。たまたま立稽古中だった Bottom が，Puck によってロバの頭をつけられ，Titania の恋人にされる。Pyramus 役の Bottom が楽屋の茂みから戻って来ると，職人達はパニック状態に落ち入り，森の中の四人の混乱ぶりを連想させる。この混乱は，

Snout. O Bottom, thou art changed! What do I see on thee?
(III. i. 109-110) (下線筆者)

と Snout の台詞に見られるようにすざまじいが，Bottom は自分の変化に気づいていない。

Bot. What do you see? You see an ass-head of your own, do you? (III. i. 111-112) (下線筆者)

「何んという事とは何んという事だ。この頭はお前の間抜け頭みたいなロバ頭だとでも言うのか」

ここで，Bottom はますます馬鹿さ加減を出していき喜劇的効果を上げている。

森の中は月夜でなければ，目が見えず，耳だけが頼りなので，誰れし

も耳が鋭敏になっていき，Bottom の大きな耳はその象徴である。化物となり Titania と恋をした Bottom の夢は，前代未聞のもので，題は‘Bottom の夢’，つまり‘底なしの夢’と Bottom 自身がつけている。人間の Bottom と妖精の Titania が恋をするからであり，両者は混乱状態で無意識のまま，love-romance が行われる。Titania の「女の蔦は，男の楡の花々しい枝に纏わりつく」（IV. i. 42）には，恋の結び目の纏わりつく意もあり，気がつかないうちに erotic power を観客の目に示している。この状態は Theseus 達の欲望ともダブルのであり，コールダーウッドもその点をついている。[5)]

この Bottom と Titania の恋は，Lysander と Hermia が，また Demetrius と Helena も森の闇の中で自分達の変身を怖れると同じように，貞節の問題を投げかけていて，人間が自然に持っている本能が引き起す無意識の恐怖を暗示している。この二人の様子を見た，寝取られ亭主となった Oberon は，changeling boy を手に入れ，夫婦円満となり，音楽を奏で Bottom を Titania と共に元の姿に戻す。この二人の関係を考えてみても Theseus と Hippolyta が幕開けで言っている月の変化が，恋する者にも変化を及ぼしている事が分る。

IV

初めに劇中劇は，‘もつれた鎖のようだ…’と述べたが，一体どういう意味か検討してみたい。『Pyramus と Thisbe』は，*Romeo and Juliet* のパロディであるが，職人達は，なけなしの知恵を絞って，十分考えて，意識して演じたはずであった。しかしその結果は，無意識のうちに劇全体が，台詞は取り違え，句読点はなしの出鱈目の芝居になってしまう。Theseus は，劇中劇を見て‘火を吐く氷’，‘燃える雪’と Oxymoron で答え，更に「この不調和をどう調和させるというのだろう。」（V. i. 58-60）と悩んでいる。台詞を正しく覚えている積りが，記憶力のない連中は無

意識のうちに，出鱈目の台詞を話し，観客にはそれがかえって面白い。*Hamlet* の劇中劇はこれと違って名代の役者連中に，Hamlet 自ら稽古をつけて，父王殺しを演じさせている。Theseus と同じ stage-audience の Clauduis は，それを見てショックを受けるが，恐らく意識せずに芝居を見ていて，あまりにリアルな爲にそうなったにちがいない。Bottom の芝居は違う。稽古の時に Pyramus と Thisbe の親達が配役されていた筈だが，本番には何故かいなくなっている。Hippolyta が，「こんな馬鹿々しい芝居は初めてだわ。」（V．i．207）と敗(けな)すと，Theseus は，「芝居とは最高のものでも，所詮実人生の影にすぎぬ，だが最低のものでも影以下ではないのだ。想像力で補えばな。」（V．i．218-219）と一言で混沌とした出鱈目の芝居を上手にまとめている。

V

ここまでで考えられる事は，Theseus と Oberon は一つの輪を二つに分割した役割をしているのではないかという事である。Oberon は，「自分達は別の精霊だ。」（III．ii．388）と言っている。つまり夜の闇の世界の王であり，day(日)の出が限界となるので，Puck に「一番鶏が鳴く前に帰って来いよ。」（II．i．266）と自分の限界を知っている。一方 Theseus は，翌朝，森のニンフ達を，狩りの途中で発見するが，自分の知らない所で何かが偶然起った事を知るのである。「五月祭の花摘み？」と感違いするが，Hippolyta の想像力が別の見方をする。

Hip. But all the story of the night told over,
And all their minds transfigur'd so together
More witnesseth than fancy's images,
And grows to something of great constancy ;
But howsoever, strange and admirable.

（V．i．23-27）

と仲々信じないのである。Theseus は，劇中劇が終ると恋人達に「さあ新床につくとしよう…そろそろ妖精達の時間だ。」（V．i．350）と妖精の世界を区別している。

Theseus の狩りの際には，Helena が Demetrius の spaniel になりたがったその spaniel 犬をはじめ，あらゆる種類の犬の不協和音が角笛と調和して一つの心地よい雷鳴の音となる。目覚めの場面（シーン）で，Egeus が四人の仲睦まじい寝姿を見て「アテネの法のお裁きを」（IV．i．154）と冷酷に迫るが前に述べたように Theseus はまともに聞こうともしない。何故ならば一晩の夏の夜の夢の中で，無意識のうちに互いに相手を求め，その結果が出ていたのだから。Demetrius の「今までの事が小さく朧（おぼろ）になっていくようだ，遙（はる）か彼方の山脈が雲となって霞んでいくように」（IV．i．186-187）と過去を振り返って言い，他の三人も異口同音に半信半疑の態である。Demetrius の「いかなる力によってか分かりませんが――といって何らかの力による事は，確かなのですが――私の Hermia への愛は，雪のように解け去り…」（IV．i．163-165）の台詞には夢と現実との狭間（はざま）をよく言い当てているし，A. レガットは，「何が起こったかという Demetrius の不思議な感情には美しい調和がある。」[6]と述べているが，よく要点をついている。つまり目に見えない‘何らかの力’が彼らに作用して，夢と現実との狭間で彼らの恋を成就した様子が分る。

結　論

最後に，私が追ってきたⅠ．月の輪，Ⅱ．恋の複雑な輪，Ⅲ．喧嘩の輪，Ⅳ．劇中劇の出鱈目の輪，調和の輪は一つ一つ意識しないでどのように繋がっていくのか。もつれた鎖がほぐされ，元に戻って一つに結ばれる。その繋がり具合は，各々因果関係があって，植物の蔦のように絡（から）まっていて，更に大きな一つの輪を作り上げる。第5幕第1場の冒頭で Theseus は，

The. Lovers and madmen have such seething brains,
Such shaping fantasics, that apprehend
More than cool reason ever comprehends.
The lunatic, the lover, and the poet
Are of imagination all compact :

（V. i. 4-8）（下線筆者）

と言う。この台詞にもあるように，月の luna から来た lunatic や lover や poet は同類だと言っているし，詩人は想像力によって人に知られないものを空なる無に形を与えるし，同様に恋する者も true love を求めて，狂い，想像力たくましく自分のものにしていく。人間は現実の世界と幻の世界（妖精の世界と言えるが）の中で無意識のうちに想像力を働かせて混沌（カオス）の中に入り込み，何らかの力によって，新たなるものを創造し，或いは元へ戻す。Theseus と Hippolyta は，月にかこつけて結婚へと急ぐ気持を問うたし，恋人達は，自分達の複雑な輪の中で true love を求めてさ迷ったし，Oberon と Titania は喧嘩をやめ，円満な夫婦に戻ったし，劇中劇の出鱈目は，stage-audience による想像力で調和を見た。また調和の限界，あるいはその狭間はやはり想像力で埋めるしかなかった。そして各々の独立した輪は，少しずつ輪の重なりの一部をひっかけあって，更に大きな一つの鎖になっていく。それにはやはり無意識のうちにもつれた輪を糸のようにほぐして，元に戻したり，月の干満のように変えたりして，まとめていくことになる。無意識の効果とは以上のように，知らず知らずに無なるものから有なるもが形づくられていくことと言える。

"Works cited"

1. C. L. Barber. *Shakespeare's Festive Comedy ; A Study of Dramatic Form and Its Relation to Social Custom.* Princeton : Prin-

ceton Univ. Press. c1959.

2. Leo Salingar. *Shakespeare and the Tradition of Comedy.* 1974. p. 82. Qtd. in Brooks, H. E., ed. *A Midsummer Night's Dream.* London : Routledge, c1979. (The Ardden Shakespeare UP 667)

3. James L. Calderwood. *A Midsummer Night's Dream.* New York : Havester Wheatsheaf, c1992. (Harvester New Critical Introductions to Shakespeare) p. 43.

4. Jan Kott. *Shakespeare Our Contemporary.* New York : W. W. Norton, c1964.

5. 3と同じ。p. 54.

6. Alexander Leggatt. *Shakespeare's Comedy of Love.* London : Methuen, 1974. p. 109.

"Text"

* Harold, F. Brooks, ed. *A Midsummer Night's Dream.* London : Routledge, c1979. (The Arden Shakespeare UP 667)

"翻　訳"

*小田島雄志訳.ウイリヤム.シエイクスピア著『シエイクスピア全集:夏の夜の夢』白水社, 1987.(白水Uブックス 12)

"Bibliographies"

1) R. A. Foaks, ed. *A Midsummer Night's Dream.* New York : Cambridge Univ. Press, 1984.

2) G. K. Hunter. *Shakespeare : The later Comedies.* Longman, c1962.

3) 日本シエイクスピア協会編.『シエイクスピアの演劇的風土』研究社,

c1977.

4) Edward A. Armstrong. *Shakespear's Imagination : A Study of the Psychology of Association and Inspiration.* Lincoln : Univ. of Nebraska Press, 1979.

5) Stradford-Upon-Avon Studies 3 : Early Shakespeare.London : Edward Arnold, c1961.

6) Anton Price, ed. *Shakespeare : A Midsummer Night's Dream.* London : Macmillam, 1983. (Casebook Series)